

リ
セ
ツ
ト
12



▲ ネイディア

リュシオンの異母妹である、クレセニアの王女。身体が弱く、王家の中で影の薄い存在。

▲ コーデリア

ルーナのクラスメイト。クライン伯爵令嬢だが、父親とは確執があるらしい。

◀ 焰王

ルーナの守護者たち

◀ 水姫

◀ 風姫

◀ シリウス

◀ レグルス



▼ 千幸(享年18歳)

超不幸体質の女子高生。

◀ ルーナ

千幸が転生した姿。リヒトルーチェ公爵令嬢。前世の記憶と強大な魔力を持ちつつ人生やり直し中。

▲ リュシオン

クレセニアの王太子。強大な魔力を持つ魔法使い。魔法が使えない状態になっていたが……

▲ フレイル

魔法師団に所属している、精霊使いの少年。他人にはその力を秘密にしている。

◀ カイン

ルーナに助けられ、公爵家に身を寄せていた、エアデルト国の第二王子。現在はクレセニアに留学中。

第一章 思いがけない再会

時には、自ら危険に飛び込むことも必要だと思いませんか？

あたたかい日が続くようになった三月中旬。

レングランド学院では、学力試験が行われていた。

学院では、基本的な座学は三年目まで。四年目からは各自選択した授業を中心に講義をとつていく形式のため、クラスメイトが揃って受ける授業は極端に減る。

しかし、年に二回ある基礎学力試験は、全員が受ける必要があった。そのため、教室の席はすべて埋まっている。

聞こえるのは、筆記用具のたてるわずかな音だけ。そこに、唐突に試験の終わりを告げる鐘の音が響いた。

「はい、ペンを置いて」

キビキビと指示を出す試験監督に従い、教室にいた生徒たちは手にしていた筆記具を机に置く。

「これですべての試験が終わりましたね。明後日からは一か月の長期休暇に入りますが、試験が終

わったからといって気を抜きすぎないように。その後には、各専門講座の試験も控えているんですからね」

試験用紙を回収した教師の言葉に、試験が終了してホッと息を吐いていた生徒たちは、呻くようなため息を漏らす。

そんな生徒たちに苦笑しつつ、教師は解散を告げると教室から出ていった。途端、静かだった教室がざわめきだす。

「ふう……」

試験特有の緊張感から解放され、銀髪の少女は小さく息を吐きだした。彼女の様子に、周囲の生徒たちは男女問わず顔を赤くする。

ただでさえ見惚れるような美貌の彼女。そんな少女の雪花石膏のような肌は今、ほんのりと桜色を帯びている。加えて、緑の瞳が嬉しそうに煌いているのだ。

その破壊力たるや、というわけだ。

少女——ルーナが机の上の筆記具を片付けていると、彼女の席に四人の男女が近づいてくる。

全員が、入学当初からのルーナのクラスメイトだ。当時から何かと一緒に行動しており、今ではすっかり仲良くなった仲間たちだった。

「はあ、やっと終わったなあ」

コキコキと肩を回しながら、四人のうちの一人——エルネストは、晴れやかな笑顔をルーナに向けた。

彼のツンツンとした赤銅色の髪は、あちこち好き勝手にはねている。そばかすの浮いたやんちゃそうな顔立ちの彼に、その髪型はよく似合っていた。

「ご機嫌だな、エル」

そう声をかけたのは、エルネストとは別の少年。

おとぎ話に出てくる王子を彷彿とさせる、金髪碧眼の少年——ラザラスは、ニコニコとご機嫌な様子のエルネストに呆れた視線を投げた。

「だって、やっと試験が終わったんだぜ？ しかも明後日から試験休みだしな！ これが喜ばずにいられるかっての」

だろつと同意を求めるエルネストだが、返ってきた反応は期待したものではなかった。

「はあ……。この、天然・お馬鹿・暑苦しいと三拍子揃ったエルが、毎度成績上位者五名に入るんだからなあ。こういうキャラって普通、頭脳より運動神経が勝ってるはずだろ？」

答えたのは、また別の少年だ。

真っ直ぐな紺色の髪と薄紫色の目を持つ少年——ファビアンは、肩を竦めながら毒を吐く。

「それは言えるな」

四人の中の紅一点の彼女が頷いて同意した。

青藍の髪と瞳を持つ長身の少女——コーディネアだ。凜とした雰囲気をもつ、クライン伯爵令嬢である。

真面目な顔でうなずき合う三人に、エルネストは目を剥いて抗議する。

「ちよ、おまえら酷いぞ！」

「いや、だがそれって皆思うことだよな……」

ラザラスもあつさりとは反対意見に同意したため、エルネストはルーナの机に両手を置いて項垂うなだれた。

「ひでえ……俺、もう泣いちゃうよ」

くすん、と大袈裟に鼻を吸すったエルネストに、全員が我慢できないとばかりに嘖うなき出す。

「むう……」

一人笑えない彼は、不満げに唸うなる。

「はは、ごめんって。冗談だよ、冗談」

「なんだ、冗談か。そっか、よかった」

フアビアンが謝罪すると、エルネストはすぐに機嫌を直した。

この素直な反応が、彼の長所であり、またいじられる所以ゆえんでもあることに、エルネスト本人は気づいていない。

(なんていうか、反応が楽しいからつい構くっちゃうんだよね)

心の中でつぶやくルーナと、同じことを皆が考えていたのだろう。すぐに、謝罪したはずのフアビアンがポロリと発する。

「まあ……正直に言うとも真実だけだな」

「なんだとー！」

「フアビアン、それは酷いぞ。まあ……僕もそう思うけど」

「いや、ラザラス。それも微妙に酷いぞ？ 真実であっても気を使ってやるのが友人としてのやさしさだ」

真面目な顔で議論し出すラザラスとコーディリアに、エルネストが我慢できずに口を挟む。

「いやいやいや、コーディリア？ それかばってないからな？ むしろ俺の傷口を広げてるぞ」

「ああ、すまない。だが間違ったことは言っていないぞ」

申し訳なさそうな表情のわりに、言葉は正反対のコーディリア。しかも、本人に毒を吐いた自覚がないのだからたちが悪い。

「おい、それもつとだめだろ……」

力なく抗議するエルネストに、我慢できなくなった皆がまたしても笑い出す。

「はあ、皆の俺への扱いって酷くないか？」

「皆、エルのが大好きって酷くないだよ」

ルーナが苦笑しつつ答えた。

「……そうなのか？」

疑わし気なエルネストに、ここぞとばかりに皆がコクコクとうなずいてみせる。

「そうだな。エルは愛されキャラだよな」

「まあ、そうかもな」

「確かに」

「そ、そうか。俺って愛されキャラか！」

嬉しそうなエルネストに、その場にいた全員が生あたたかい視線を向けた。

（ああ……馬鹿な子ほど可愛いとかつて真理かも……。でもエルってば、こんなんで大丈夫なのかな？ 一応子爵家の嫡男様だけだ）

ルーナは、単純明快なエルネストの将来を、ちよつぱり不安に思つたのだった。

「そういえば、ルーナとコーディネリアはその後どうするんだ？」

話が一段落したところで、ラザラスがルーナとコーディネリアに尋ねる。

「どうするって？」

ルーナは不思議そうに聞き返す。

するとラザラスは、驚いた様子でエルネストを振り返つた。

「おい、エル。おまえ、ルーナたちに訊いてないのか？」

ラザラスに詰め寄られたエルネストは、「あ」の形のまま口を開けている。どうやらルーナたちに、何かを伝え忘れていたらしい。

「はあ、成績優秀だけど頭脳明晰ずのうめいせきって言葉がエルネストと結びつかないのは、そういうところが原因だよ……」

ファビアンは呆れたように言うと、ルーナとコーディネリアに向き合つた。

「エルに訊いておいてって頼んでただけで、どうやらすっかり忘れてたみたいだね」

「何かあるの？」

ルーナが尋ねると、ラザラスが代わつて答えた。

「実は、スワイドが見せたいものがあるから、店の方に来ないかって言ってきたんだ。それでせつかくだし、ルーナたちも誘おうって話になったんだよ」

「そういうことだったのか」

コーディネリアはエルネストを見ながら苦笑すると、納得とばかりにうなずいた。

「それにしてもスワイドかあ」

ルーナは懐かしそうに目を細める。

スワイドは、レングランドに入学した当初のクラスメイトだ。今いる四人と共に、ルーナが仲良くしていた友人である。

もっとも、皆より年上だったスワイドは、一昨年、一足先に学院を卒業していた。

レングランド学院で、念願の魔道具マジックツール技師の資格を取つた彼は、現在、王都の魔道具専門店できいきと働いている。

「ルーナにも会いたがつてたよ。この前訪ねた時は、一緒に行けなかったから。ちよつぱり君が学院を休んでた時だね」

「ああ、そうだったんだ……」

ファビアンの言葉に、ルーナは思い返す。

（きつとその頃、わたし、リカール王国にいたのよね……）

ルーナの暮らすクレセニア王国の王太子、リュシオン。そのリュシオンがかつて、禁呪によって生命の危機に陥ったことがある。その時、彼を救うべく、ルーナはリカール王国へ行った。そこにリュシオンに禁呪をかけた元凶である禁呪使いがいるとわかったためだ。その者を倒すため、リカールを訪れたのだが、それがもうずいぶん前のことのように思える。

(もう一年ちよつとになるんだ……)

ルーナが感慨深く思っていると、ラザラスが尋ねてくる。

「それで、どうする？」

「行きたいな。わたしも久しぶりにスワイドに会いたいし。コーデリアはどうする？」

「ルーナが行くなら、わたしも行く」

「よし、じゃあ早速向かうか！」

ルーナとコーデリアの返事を聞くや否や、気を取り直したエルネストが元氣よく宣言する。なんとも調子の良い彼に、皆はクスリと笑みを漏らしたのだった。

+

王都の南に位置する商業区。

スワイドが勤める魔道具専門店は、学院のある東区と隣接した地域にあった。

そのため、馬車ならさほどかからずに辿り着くことができる。けれどせっかくの機会だ。ルーナ

たちは馬車ではなく、徒歩でスワイドのところに行くことにした。

レングランド学院では、寮の門限までに帰宅するのであれば生徒の行動に対する制限は少ない。それは、すでに成人している生徒がいるように入学年齢の異なる生徒たちに配慮したためである。

とはいえ、ルーナやコーデリアのような貴族令嬢の場合は、そう簡単ではないのも事実。

誘拐のおそれはもちろん、見目麗しい少女ということだけでも危険が多く、街に出るとなれば、護衛の手配も必要だからだ。

そうしたわけで、彼女たちの気軽な外出はむしろ珍しい。

しかし、今日の場合は、同じく貴族令息であるエルネストたちの計らいで護衛も手配済み。その条件であれば、ルーナたちに同行を断る選択などなかった。

五人は、人の行き来が多い通りを選んで進んでいく。

学院近くの通りといえば、生徒やその家族向けの集合住宅と共に、学用品や生活雑貨を扱う店が多く並んでいる。

それらの店を眺めながら歩くため、それなりの距離の移動も、ルーナたちにとっては苦にならないかった。

一行はのんびり歩き続け、東区と南区を分かť大通りに辿り着く。

スワイドの勤める店は、そこからほんの目と鼻の先だ。

「あとちよつとだな！」

通りを渡り終えたエルネストの言葉に、全員がうなずく。それからすぐ、ルーナの視線の先に目的地が見えた。

『ライデル魔道具店』

王都の名を戴いた魔道具専門店。それが、スワイドが勤める店だ。

このあたりは大通りのような賑わいはないが、人の行き来はそれなりにある。行きかう人の多くは、この地域に住んでいるのか、飾らない服装の者が多い。そんな、地域密着型の店が立ち並ぶ場所に魔道具店があった。

店構えは、周りに立ち並ぶ商店と変わらない。しかし、入り口のショーウィンドウに並べられているのは、用途が謎のものばかりだった。

一応、目は引く。しかしその目の引き方は、「素敵」とか「これがほしい」という内容ではなく、「これは何だろう?」という意味合いでだろう。

「お、これって新しくできた写し絵^{うつえ}ってやつか?」

一見すると、正面に穴がある四角い箱――

その魔道具を指さし、エルネストがつぶやいた。

「ほんとだ。いいよな、これ。誰でも念写^{ねんしゃ}みたいなのが出来るんだよな」

「うん、綺麗な風景なんかをそのまま写し取れるんだ。僕もほしいんだよね」

エルネストを中心に、ラザラスとフアビアンがはしゃいでいる。

そんな男子三人を眺めて、ルーナはコーデリアに苦笑した。

「男の子ってああいうの好きだよね」

「本当に」

コーデリアは肩を竦めると、ショーウィンドウの前でわいわいと意見を述べ合っている三人をよそに、店の扉に手をかけた。

扉を開けると、カランカランと呼び鈴が音を立てる。

コーデリアを先頭に、ルーナも店内へと足を踏み入れた。

「わあ」

ルーナは、室内の様子に感嘆の声をあげた。

店内は左側に小さめの魔道具、右側に大型の魔道具が陳列してある。通信の魔道具のような装飾品型のもは、奥にあるショーケースの中に納まっているようだ。

そのショーケースの向こうに、老年の男性がにこやかに立っていた。

「やあ、いらっしやい、お嬢さん方」

「こんにちは」

「お邪魔する」

ルーナとコーデリアが挨拶したところで、エルネストたちも店内に入ってきた。彼らの姿を見て、男性がおやつと片方の眉を上げる。

「これはこれは。スワイドの友人たちだね」

「こんにちは、ネッドさん。久しぶり」

エルネストが片手を上げて挨拶すると、それに続いてファビアンとラザラスも挨拶する。

「お久しぶりです」

「こんにちは」

「よく来たね。スワイドは奥にいるからどうぞ」

「はい、ありがとうございます」

ラザラスは礼を言ってから、ルーナたちを促した。そんな彼に、ネッドが驚いた顔をみせる。

「おや、このお嬢さんたちもそうなのかい？」

「ああ、ネッドさんは初めて会うかもしれないね。彼女たちも僕たちと同じ、スワイドの友人ですよ」

ファビアンが答えると、ネッドはなるほどと何度も頭を上下させる。

「そうかそうか。それじゃあ、皆ゆっくりしていくといい。今日はいつ、休みのはずなんだが出てきていてね。奥で作業しているから」

「わかりました。ありがとうございます」

ラザラスは、再度ネッドに礼を言って歩き出す。

彼が向かうのは、店の奥にある扉だ。

（従業員さん用の扉？ いいのかな……）

ルーナは落ち着かない気分でラザラスに続く。

しかし、ラザラスをはじめとした男子たちに、躊躇う様子はない。

シンプルな木製のドアにラザラスが手をかけて押すと、キイとわずかな音を立てて扉が開く。扉の向こうには、店内の半分ほどのスペースの部屋があった。

一面は窓だが、他の壁面は本棚や大小の棚で隙間なく埋められている。中央には大きな作業台があり、その周りにまばらに椅子が置かれていた。

その作業台の、窓を背にした場所に一人の青年がいる。

長身でがっしりとした体格。短く刈り上げた暗褐色の髪とかんらん石のような黄緑色の瞳をした青年——スワイド・リーガルは、ニカッと笑うと片手を上げた。

「よう、久しぶりだな、皆！」

良く通る声が、楽し気に室内に響く。

「スワイド！」

ルーナは、久しぶりに会う友人に思わず駆け寄った。

それに続くように、全員がスワイドの周りを囲む。

「元氣そうだな！」

挨拶をしつつも、キョロキョロと周囲に視線を向けるエルネスト。そんな彼に、スワイドは呆れまじりに笑った。

「おう！ エルの方も相変わらず落ち着きねえな」

「確かに言える」

スワイドの言葉に、ファビアンがくくつと笑いを押し殺す。

「そんなことないだろ、俺だってもう子供じゃないんだからな！」

エルネストはムキになって言い張るが、周りの視線は生あたたかい。

(でも確かに、わたしの周りのリユーやカイン、フレイルに比べると、エルは幼いつていうか無邪気だよなあ)

ルーナの思考を知れば、すかさず「比べる対象が悪すぎる！」と言われそうだが、幸いそれを知る者はいない。

拗ねるエルネストを宥め、スワイドは皆に椅子をすすめた。

落ち着いたところで、ルーナはスワイドに尋ねる。

「スワイド、この部屋は？」

「ああ、ここは持ち込まれた魔道具を修理したり、開発、改良なんかをする作業部屋だ」

「へえ……じゃあ、これもそうだったものか？」

スワイドの返答を聞き、コーディアが机の上の箱を指さした。

買い物かごより少しだけ大きな箱は、木製でなんの飾りもない簡素なものだ。それゆえに、魔道具とはとても思えなかった。

「これもれっきとした魔道具だぜ。というか、これを見せてやりたかったから、おまえらを呼んだんだよな」

「これが？」

ラザラスは、なんの変哲もない箱を前に首を傾げた。

「な、な。早く動かして見せてくれよ！」

待ちきれないエルネストが強請ると、スワイドは笑って箱に手を伸ばした。

「ここに魔石があるだろ？ これに触れて、っと」

スワイドが箱についていた、小さな赤色の魔石に触る。

その途端、箱の側部から女性の声が聞こえてきた。

『——です。ユレイ地方では、オルという珍しい植物が自生し、それはこの地方の特産であるユレイ織物の原料となっています』

少しだけ緊張が窺える声音。

どうやら、何かの本の一文を誰かが朗読したものらしい。

(これって、レコーダー?)

ルーナは、前世の記憶に基づいて、箱の正体を察する。

一方、ルーナとスワイド以外の者たちは、箱からまったく知らない女性の声がすることに驚きを隠せないでいた。

「これって、〈通信〉の魔道具じゃないよな？」

「ああ。これはな、人の言葉をそのままこの箱に記憶する魔道具だ」

ラザラスの質問に、スワイドはドヤ顔で答えた。

双方が魔道具を持ち、それぞれの間でやり取りする〈通信〉の魔道具。それはルーナが幼い時に開発したものだ。現在までに多くの改良がなされ、一般まで普及したため、クレセニアではさほど

珍しいものではない。

だが、目の前にある魔道具は、やり取りをするものではなく、『声』を記憶するものだ。「すげえ。声の写し絵^{うら}つてことか！これがあれば、劇場に行かなくても流行りの歌姫の声が聞けちゃったりするってことだよな？」

「それだけじゃないよ、エル。大事なやり取り……聞き逃したくない講義の内容とかも、ここに記憶しておけば、いつでも聞き返せるってこと。これはすごいね、スワイド」

エルネストが興奮して言えば、ファビアンも食いつくように同意する。

彼らの反応に、スワイドが満足げにうなずいた。

「まあ、まだ数秒の記憶しかできなくてな。これから改良していくところなんだ」

「え？ ということは、この録音機つてスワイドが作ったの？」

ルーナが驚いて訊くと、スワイドはあっさりと首肯する。

「そうだぞ。てか、録音機か。いいなその名前」

一人納得しているスワイドをよそに、ルーナは内心で舌を巻いた。

（レングランドの研究所ならともかく、街の魔道具屋さんに勤めながら、商品開発までしているって……。スワイド、すごすぎでしょ……）

彼女の前世——高崎千幸^{たかさきちゆき}であった頃の日本であれば、国ではなく、一企業が商品開発や研究をすることも珍しくなかった。

しかし、ここはサンクトロイメという世界だ。

魔法技術では、他国の追隨^{ついでい}を許さないクレセニア王国だが、それでも商品開発や研究といえばレングランドの研究所でやるのが一般的だ。

それを、個人で成し遂げるのはとても困難なはず。

日本で例えるならば、街の電器屋さんが、家電の販売だけではなく、商品開発までやってのけたということだ。

そう考えれば、スワイドがどれだけすごいのかよくわかる。

レングランド学院で学んだとはいえ、普通の一人人がやれることではないのだ。

「スワイドつてば、発明をするなら研究所に就職した方がよかつたんじゃないか？」

ふと思いついたように、コーデリアが尋ねた。それに対し、スワイドが頭を掻いて答える。

「いや、確かに開発とか、既存の魔道具の改良研究なんかだと、レングランドの研究所がいいんだろうけどな。俺、庶民的な魔道具を触ったりするの好きなんだよ。ここは、そういうものに触れる機会も多いし、自由時間にこういったものを作ることも許可してくれる。だから俺はここで働いて満足なんだ」

「そう」

スワイドの言葉に、コーデリアは眩^{まよ}しそうに目を細めた。

しっかりと考え、見極め、現在を自分の糧^かとして未来に進む。そんなスワイドが、彼らには頼もしく見えた。

久しぶりのスワイドと、楽しい時間を過ごしたルーナたち。けれど、そんな時間もそろそろ終わ

りだ。

普段気軽に街歩きができないルーナたちのために、せっかくの機会だからと帰りは商店街を覗いていこうと決めていたのだ。そうなるとあまり長居はできない。

わざわざ店先まで出て見送るスワイドに、ルーナたちは笑顔を返した。

「スワイド、また来るね」

「おう。また来てくれよな」

ルーナの頭を撫で、スワイドはニカリと笑う。

もうルーナは、入学当初の幼い少女ではない。だが、スワイドにとってはいつまでも手がかかる妹分なのだろう。

そんな彼らの様子を、他の者たちは微笑ましく見守っていた。

「それじゃ、また！」

「気をつけて帰れよ！」

スワイドの元気な声を背に、ルーナたちは店を後にしたのだった。

+

スワイドと別れたルーナたちは、気になった店をのんびり冷やかしながら帰路を歩いていた。しかし、同年代とはいえ、男子と女子。

同じ店が気になることもあるが、それぞれ違う方向に興味が向く場合も多い。

「あ、これいいな」

エルネストが足を止めたのは、武器防具を扱う店の前。

「ほんとか」

「うん、それにあの剣もいいな」

ファビアンとラザラスも気になったのか、三人して店の商品に釘付けだ。

ルーナとコーデリアは、顔を見合せてクスリと笑う。

「ねえ、ゆっくり見てきたら？」

「そうだな。気になるんだろう？」

女子二人に言われ、三人はどうしたものかと躊躇ちゅうちゆする。迷っている彼らに対し、ルーナはさらに後押しした。

「じゃあ、わたしたちはあっちのお店を見るから。早かった方と合流ってことでどうかな？」

「いいのか？」

思わず聞き返すエルネストに、ルーナとコーデリアはうなずいてみせる。

実際、示した店に興味があるのは本当なのだ。

「ありがとう。そっちにも護衛をつけるから」

ファビアンはそう言うのと、ついてきている数名の護衛に目配せした。

本来であれば、護衛の人数を半減させるのは良くない。しかしこの通りは、警邏けいろうの事務所が近い

ため治安も良かった。そのため、店に入っているなら危険もないと判断したのだ。

「それじゃあ、わたしたちはあつちに行くね」

「ああ、二人とも離れないようにね」

「はい」

「わかってる」

ファビアン^の忠告に、ルーナとコーディネリアは揃って返事をする。それに安心したのか、男子三人の意識はすぐに件の店に移っていった。

「コーディネリア、わたしたちも行こっか」

「うん。あの店だろ？」

ルーナが声をかけると、コーディネリアは道を挟んで向かいにある店を指さした。

パイン材でできたロτζ風の店は、入り口のドアにガラスが嵌め込まれ、そこにレースのカーテンがかけられている。

ドア横のショーウィンドウには、リボンと共に置かれた帽子やバッグ、ぬいぐるみなどが飾られていた。

「すごく可愛いお店だね！」

「ああ。だが、可愛すぎてわたしには似合わないかも」

コーディネリアが自嘲気味に言うのと、ルーナが彼女をキツと睨みつける。

「似合わないなんてことない！ それに、仮にも似合わないとしても、好きなものをそんな他人

の評価で遠ざけるなんて間違ってるよ」

「そ、そうか……」

ルーナの剣幕に、コーディネリアは気圧されつつつぶやく。

「そうだよ！」

ルーナはきつぱりと言い放つと、コーディネリアの腕をとった。

（もう、ほんとは可愛いもの大好きなんだって、バレバレなのに。それに、口調こそ男の子っぽいけど、コーディネリアってば、すごく綺麗で女の子らしいんだよね。案外自分ではそういうの、わかんないのかなあ）

ルーナは、戸惑うコーディネリアをよそに、その腕を引つ張って歩き出す。

通りを横切り、反対側の歩行者専用の歩道に着いたところで、ルーナはコーディネリアの腕をようやく離した。

目当ての店は、そこから目と鼻の先だ。

改めて二人が歩き出した時、前を歩いていた男女の間を、一人の男が走りながら強引に分け入ってきた。

「キャッ」

男がスピードを緩めることなく突っ込んできたため、寄り添って歩いていた男女は当然のように突き飛ばされた。

「大丈夫か!?」

衝撃で尻もちをついた女性に、連れの男性が慌てて駆け寄る。

その状況にルーナとコーデリアは呆気にとられていた。しかし、男は立ち止まることもなく、今度はルーナたちに突進してくる。

「危ない！」

コーデリアが叫び、咄嗟にルーナを庇う。そのせいで、男の進行方向に、コーデリアが立ち塞がることになった。

次の瞬間、男が彼女にぶつかると。

「痛っ」

衝撃によるめきながら、コーデリアは顔を顰めた。

一方男は、自分からぶつかったにもかかわらず、そのまま走り去っていく。

「ちよっ……!!」

思わず抗議の声をあげかけたルーナだが、街灯の柱に凭れかかるコーデリアの方が先だと思い、彼女に駆け寄った。

見た感じ怪我はないようだが、どこか痛むのか、コーデリアは下を向いたままだ。

「コーデリア、大丈夫？」

ルーナが覗き込むと、コーデリアが愕然とした表情で自分の右手首を見ていることに気づいた。

「まさか、さっきのか……!?!」

コーデリアはつぶやくと、男の去っていった方向を振り返る。そして、男の姿がもう見えなくな

っていることに気づくと、慌てたように俯いた。

「そんな……」

彼女から漏れる弱々しい声音に、ルーナは焦る。

(どこか怪我を……?)

もしかししたら、酷い痛みがあるのかもしれないと、ルーナはコーデリアの肩に手を回し、再度声をかけた。

「コーデリア、どこか怪我をしたの？ 大丈夫？」

必死に呼び掛けるが、コーデリアは何か気にとられているらしく、反応がない。

「コーデリア、コーデリア!!」

ルーナがなおも大きな声で呼び掛けると、コーデリアの意識がようやく彼女に向いた。

「ど、どうしようルーナ。あれを盗られたんだ……」

「え？ あれ？」

一瞬その言葉の意味がわからず、ルーナは困惑しながら聞き返す。だが、盗られたという単語で、あの男はスリだったのかと思に至った。

「いったい、何を盗られたの？」

コーデリアの切羽詰まった様子から、それがよほど大事なものと察せられる。

しかし、コーデリアがさほど現金を持ち合わせていないのは、ルーナも知るところだ。とすれば、たとえ財布をすられたのだとしても、ここまで困るほどではない。

(コーデリアの様子は、まるで形見を失くしたとか、そんな感じだよね)

そう思うものの、これまたそこまで大事なものを、スリに奪われるような状態で持ち歩いているだろうかという疑問もわく。

なんとか落ち着いてもらおうと、ルーナは俯いたままのコーデリアの肩を抱いた。

そのぬくもりに縋り付くように、コーデリアがルーナに顔を向ける。

二人の視線が交わった瞬間、ルーナは驚愕に目を見開いた。

「え、コーデリア、その目……」

ルーナの言葉で、自分の状態に気づいたのだろう。

コーデリアはハッと息を呑むと、ルーナの視線から逃れるように顔を逸らした。

(どうということ？ 彼女の目は……)

ルーナは、混乱しながら考える。

一瞬見たコーデリアの目。

それは、いつも見ているものとは違っていた。

白目の部分がなく、淡い水色が広がるその目。そして黒目の部分全体が、藍色の瞳孔となっていた。しかも、その瞳孔は猫のように縦に細められている。

ルーナの知る、魔族の目とは違う。だが、一般的な人の目とも間違いなく違っていた。

疑問に戸惑うルーナだったが、コーデリアの様子が目に入ってハッとする。

(今はそんな疑問いいじゃない！)

自分に言い聞かせると、ルーナは蒼褪めて震えるコーデリアをぎゅっと抱きしめた。

「コーデリア、しっかりして」

「どうしよう。あれがないと……あれがないと……」

コーデリアは、うわごとのようにそうつぶやき続ける。

そこからルーナは、先ほどのスリが奪ったものが、彼女の目を隠すための魔道具だったのだと気づいた。コーデリアがずっと右手首を押さえているところから、きっとブレスレットの類だったのだろう。

(幻惑の魔道具？ それとも他のもの？ どちらにせよ、それがないとまずいってことよね。でも、すぐ用意できるものじゃないし)

ルーナは途方に暮れて、周囲を見渡す。

彼女たちの前にぶつかられた男女が騒いでいるため、今のところ、ルーナたちに注目する者はいない。

しかし、こちらに目が向き、コーデリアの目に気づかれれば……

人は、自分たちと違う者に対して手厳しい。そして、未知なるものにも。

明らかに人とは違う瞳を持つコーデリアの目を見た時、下手をすれば魔族と騒ぎ出す者が出るかもしれない。

実際に魔族と会い、明確に彼らを知るルーナとは違い、一般の人は魔族と対面したことなどない。おとぎ話として、それらしい特徴を知るだけなのが普通だ。だからこそ、人と違うものが魔族の証

だと、短絡的に考える者がいてもおかしくない。

(どうしよう……どうすれば……)

オロオロと狼狽うろたえてしまうだけで、良い知恵も浮かばない。その状況に、ルーナは唇を嚙む。

(魔法を唱えるのは、余計に注目を集めるだけだし、〈幻惑〉の魔法具や護符なんて、街で手に入るのは無理……)

クレセニア国民にとって魔法は身近だが、しかしそれを使える者は少ない。そのため、魔法の詠唱などすれば確実に注目を浴びるのだ。

また、特殊な魔法具や護符となれば、一点ものが多く、すぐに手に入れるのは不可能に近い。

考えれば考えるほど八方塞がりの状況に、ルーナはますます焦る。

そんな時だった。

「大丈夫？」

柔らかい女性の声がルーナの耳に届く。

振り返ると、彼女たちのすぐ後ろに一人の女性が立っていた。

緋色の髪と、蜂蜜のような柔らかな茶色の瞳を持つ彼女は、理知的な顔立ちに良く似合う銀縁の眼鏡をかけている。

服装はシンプルな普段着用のドレスで、貴婦人ではないと思われるが、かといって庶民とも言い難い。

当て嵌めるならば、ガヴァネス家庭教師といった職業の女性に見える。

そんな彼女の登場に、ルーナは焦った。

確かに助けは必要だ。しかし、コーディネアのこの状態を考えるならば、誰にも近づいてほしくない。

「あ、あの……」

ルーナは、女性に声をかけようとしたが、すぐ言葉に詰まってしまった。

(どうしよう、近づかないでくださいなんて、助けてくれようとした人には言えないよ)

女性の行動は、あくまで善意だ。

こちらの都合ではありがた迷惑であっても、居丈高に拒否することなど、ルーナにできるはずもなかった。

一方、彼女の葛藤など知る由もない女性は、そのままコーディネアに視線を向ける。

覗き込むようにコーディネアを見、女性は彼女の目に気づいたようだ。

「あなた……」

息を呑む女性に、ルーナの混乱はピークに達した。

(どうしよう、この人が騒いだら……)

いつそ魔法で昏倒させるべきか――

そんな物騒な対処法をルーナが考えたところで、女性が驚くほど穏やかに言った。

「大丈夫、任せなさい」

「え？」



困惑するルーナをよそに、女性は自分の右腕から、つけていた宝珠を連ねたブレスレットを外した。

「これを嵌めて」

女性は、手に持ったブレスレットをコーデリアに差し出す。しかし、俯うつむいて震えるばかりのコーデリアがブレスレットを手を取ることはない。

（この人を信じられる確証はない。でも、騒がないでいてくれただけでも、信じてみる価値はあるんじゃないかな……）

ルーナは覚悟を決め、コーデリアの代わりに、差し出されたブレスレットを受け取った。そして、手にしたそれを彼女の腕に嵌める。

驚いたコーデリアが、ルーナの方を向いた途端——その変化は現れた。

コーデリアの白目部分が、水色から元の白目に変わる。そして、どこから見てもいつもの彼女の目になったのだ。

どうやら女性が渡してくれたブレスレットは、コーデリアが使っていたものと同じ効果をもたらすようだった。

「コーデリア、これで大丈夫だよ」

ルーナの言葉に、コーデリアが放心したようにうなづく。

自分の秘密を知ってしまったルーナのことや、突然現れた救い手のこと。思うことは色々あるものの、コーデリアは最大の危機が去ったことに安堵した。

二人は視線を合わせ、ホッと息をつく。
そして、改めて礼を述べようと振り返った。

しかし、その場にいるはずの彼女の姿がない。辺りを見ても、去っていく姿すら見受けられなかった。

(え、目を離れたのって、ほんの一瞬だよね?)

まるでその場から消えてしまったかのような女性に、ルーナは哑然とする。

「あの人はいったい……」

ルーナつぶやきに、コーデリアは軽く頭を横に振った。

「わからない。けど、わたしの恩人だ」

「そうだね」

その言葉に、ルーナも力強くうなずくのだった。

十

寮に帰り着いたルーナとコーデリアは、自室には戻らず、共有の居間に腰を落ち着けた。

コクリと、自分で淹れた紅茶で喉を潤したルーナは、向かいに座るコーデリアをそっと窺う。

お互いが黙ったまま、幾ばくかの時間が流れた。

そうしてようやく、コーデリアが口を開く。

「気に、なるよな」

つかえながら訊かれ、ルーナはしばし躊躇ったのち、コクンとうなずいた。

「気持ち悪いだろ？ まるで魔ぞ……」

「そんなわけない！」

コーデリアの言葉を遮り、ルーナは叫ぶ。

確かに、コーデリアの目がどうしてあんなったのかという疑問もあり、できれば打ち明けてほしい思いはある。

だが、彼女自身を忌避する思いはなかった。ましてや、コーデリアが言いかけたように、魔族だなどと思うはずもない。

そんなルーナの気持ちは、幸いなことにコーデリアに通じたのだろう。

「ありがとう……」

ホッとつぶやくと、彼女は覚悟を決めるように、膝の上で組んだ両手に力を込めた。

「この目は、母からの遺伝なんだ」

「お母さまの？」

「そう。母は、獣人の血を引いていた。わたしの目は、その先祖返りらしい」

コーデリアの告白に、ルーナはなるほどと納得する。

獣人。

サントロイメに存在する種族で、獣の相を持つ者たちだ。

もともとなのか、それとも迫害されたためかは謎だが、獣人は大陸外の島で暮らす者が大半だ。そのため、クレセニアで彼らを目にすることは珍しい。

以前ルーナは、シウとカイという、攫^{さら}われてきた獣人の兄弟を助けたことがある。そのため、彼らが獣相という一般的な人間とは違う特徴をもっているものの、人であることにかわりはないことを良く知っていた。

コーデリアの獣相は目だけのようだ。しかし白目の色が違うという、純粹な人との明確な違いは、排他的な人間には受け入れがたいだろう。

ましてや、白目の色が違うというのは、魔族の特徴として知られていた。

現在では魔族は、架空の存在だと思われる。だが、決して忘れられているわけではない。むしろ、今でも人々に恐怖をもって語られる存在だった。それゆえに『人と違う』『魔族に似ている』の二つが合わさっただけで、危険な存在だとみなされる可能性は高い。

瞳のことを、彼女がルーナにも秘密にしていたのは、それらのことを考えれば十分理解できた。(それでも勇気を出して、わたしに教えてくれたんだ……)

ルーナにとって、コーデリアは親友といえる。

だが、彼女にとって自分の存在がそうであるかどうかはわからない。だからこそ、コーデリアがルーナを信頼し、話してくれたことが嬉しかった。

もともと獣人に対して偏見もなく、さらに言えば、本物の魔族と対峙したことがあるルーナだ。疑問さえ晴れば、今までと態度が変わるはずもなかった。

「打ち明けてくれてありがとう。これからは、わたしも協力するから」

コーデリアの手を取り、ルーナはにっこりと笑う。心配した嫌悪の情が彼女から感じられないことに、コーデリアは心の底から安堵した。

「ルーナ、ありがとう……本当は怖かったんだ」

受け入れてもらえるなんて思わなかった。そうコーデリアが言いたかったのだと、ルーナにもわかる。

「コーデリアはコーデリアでしょ？」

ルーナが何でもないかのように言うと、コーデリアは涙目でうなずいた。

そして、ぼつりぼつりと話し出す。

「わたしの母は、わたしが幼い頃に亡くなってしまった。それまでは、父ともうまくいっていたんだが、母が亡くなってから父は、わたしに関わらなくなった。たぶん、この目が疎^とましかったせいじゃないかな」

「そんな……」

「でも、いつか自分を見てくれるんじゃないかって、ずっと思ってきた。勉強や、マナー。剣だつて、父に見てほしくて頑張ったんだ。けど、父はますます遠ざかるだけだった。それでも、レングランドみたいな名門学校に入れば、違うんじゃないか。褒めてくれるかもって……」

「コーデリア」

ルーナは、コーデリアの告白に眉尻を下げる。

彼女がレングランド学院に入学した背景を、優秀で真面目な彼女のことだから学ぶために選択をしたのだと、ルーナは単純に考えていた。

だが貴族令嬢であれば、花嫁学校といわれる、マナーなどを重点的に学ぶ学校に行く者も多い。古い考えの保護者ならば、むしろそちらの進路を選ばせることが普通だ。

「結局、『おまえごときが入学できるはずもない』って言葉に反論したくて、わたしはレングランド学院に入ったんだ。なのに、自分より優秀な子がいることが認められず、最初はルーナに酷いことをしたりもした」

入学当時のことを思い出してか、コーデリアは恥ずかしそうに笑う。

(あの時、そんな理由もあったんだ……)

ルーナは、コーデリアの辛さを思つて顔を歪めた。

それと同時に、長期の休暇であろうと寮に残ることの多い彼女に対し、領地が遠いからなどという言葉を信じ、不審にも思わなかった自分を悔いた。

「きつと、父はわたしのこの目が周囲に発覚することを恐れていたんだ。獣人の先祖返りというだけでも醜聞だろうけど、魔族じゃないかなんて疑われたら、父も終わりだ……」

自嘲するコーデリアに、ルーナは愕然となる。

そんなことない、と言いたくなかった。

しかし、体面を重んじる貴族にとつて、醜聞は何をおいても避けなければならぬものだ。

コーデリアの父がどんな人物なのかは知らないが、貴族であるのならば、そのような考え方をし

てもおかしくなかった。

蒼褪めるルーナに、けれどコーデリアは穏やかに微笑む。

「でも、いいんだ。ここに入学して、ルーナと出会えたこと。エルネストたちと出会えたこと。わたしの選択は間違つてなかったって思えるから。ルーナ、ありがとう」

ルーナは、コーデリアの言葉に目を潤ませる。そして、コーデリアの目を見てはつきりと告げた。「コーデリアは、わたしが守るから！ 絶対、絶対守るから！」

今回は、見知らぬ女性に救われたものの、もしかしたらこの先、彼女の秘密が発覚する日が来るかもしれない。

それによつて、コーデリアが孤立することがあつても、自分だけは彼女と寄り添おう。

ルーナは、固く自分に誓つたのだった。

+

スワイドのところへ行つてから二日後。

春の長期休暇に突入したルーナは、寮から公爵邸へと戻つてきていた。

王都にあるその自室の中で、ルーナは日当たりの良い窓際のソファに腰かけてぼんやりと窓の外を見る。

「ふぁ……昨日は久しぶりに母様と話し込んだからなあ」

あくびを噛み殺しながら、ルーナはテーブルの上に置いてある、先ほどまで読んでいた本を手にとった。

いつも週末には寮から帰宅するルーナだったが、公爵である父と、その妻である母は多忙で、休日顔に合わせる事ができないことも多かった。

そのため、昨夜は久しぶりの親子水入らずで盛り上がったのだ。

(理解があつて、わたしのことを溺愛してくれる父様と母様。前世のこともあるし、感謝の気持ちはいつも持っていたけど、これって本当に幸せなことなんだよね)

コーディネアとその父の関係を考えれば、自分がどれほど恵まれているかということが、これまで以上に身にしみる。

(皆を、もつともっと大事にしなきゃだね)

そんなふうルーナが改めて思った時、部屋の扉がノックされた。

「はい」

「お嬢様、お知り合いの方が訪ねていらつしやいましたが……」

扉の向こうから遠慮がちにメイドに声をかけられ、ルーナは首を傾げながらソファから立ち上がる。

春休みに突入したものの、今日、誰かと会う約束をした覚えはない。

(いったい誰だろう?)

ルーナは不審に思いつつも、扉を開けて目の前のメイドに尋ねた。

「訪ねてきたって、どちら様？」

「はい、ユーバメツレ様とおっしゃる女性です。客間でお待ちですが」

「ユーバメツレ……」

聞き覚えのない名前に、ルーナは首を傾げる。

しかし、門前払いではなく、客間に招き入れられているのなら、少なくとも家令が不審人物ではないと判断したということだ。

「どんな人だった？」

知り合いかもしれないと、ルーナはさらに尋ねる。

「はい。緋色の髪に、茶色の瞳の女性です。学院からの使者ではないのですか？」

メイドは不思議そうにルーナを見た。

(緋色の髪に茶色の目。学院の使者ってことはそれっぽい感じの人ってことだよな。……あれ、それって)

ルーナの脳裏に浮かんだのは、先日コーディネアの危機を救ってくれた女性だ。

(とりあえず、会ってみればわかることだよな)

「案内してもらえますか？」

「かしこまりました」

メイドに続いて歩き出しながら、ルーナは内心さらに首を捻るのだった。

客間の扉が開かれ、中の様子がルーナの目に入る。

そこにいたのは、予想通りの人物だった。すなわち、コーディネアを助けてくれた女性だ。軽く挨拶を交わした後、対面のソファに腰かけ、ルーナは改めて目の前の女性を凝視する。彼女の服装は、先日と同じようなものだ。

（何故この人が……？　というか、わたしの家がどうしてわかったの？　ひょっとしてあの時のブレズレットを買い取れとかそういう話？　あれで助かったのは確かだし、買い取るのは問題ないけど、すごい金額を請求されたらどうしよう……お小遣いで足りないなら、父様に助けてもらわないとだめだよね……）

内心で色々なことを考えながら、ルーナは相手が口を開くのを待つ。

その視線を真つ向から受け止めて、女性はにっこりと笑ってみせた。

「ふふ、久しぶりね」

「え？」

女性の第一声に、ルーナは疑問の声をあげる。

（久しぶり？　え、この間からってこと？　いやでも、そんな前じゃないし……）

困惑するルーナを楽しむように、彼女は悪戯っぽく片目を閉じた。

「まあ、この姿ではわからなくても仕方ないわね」

「どういうことですか？」

ルーナは訝し気に目を睦めた。

「やっぱり気づかないかしらね。じゃあネタばらしをしましょうか」

「いったい……」

意味深な言葉を連ねる女性に、ルーナは知らず知らずのうちに眉間に皺を寄せる。そんな彼女によそに、女性が落とした爆弾は相当な威力だった。

「あたしの名前は、ノリリーナ。そう言ったらわかるかしら？」

「え、は……ええええええ!？」

一瞬呆けた後、室内にルーナの驚愕の叫びが響き渡った。

驚きが収まったところで、ルーナはまじまじと目の前の女性——ノリリーナを見つめた。

ノリリーナとルーナは、数年前に知り合っている。

獣人たちに『とこしえの賢者』と崇められる彼女。その知恵を借りようと、ルーナたちは遠く、大陸の北の果てまで出向いたのだ。

（大きなピンク鶏か、頭良さそうな女の人になってる……異世界すごい）

あの時の姿を思い浮かべながら、ルーナはノリリーナを凝視する。

魔法には〈変化〉というものがある。

まったく別人の姿に、自分を見せる魔法だ。

その魔法を使った場合、術者以上の魔力がある人間には、それが歪みとして伝わる。そのため、〈変化〉の魔法を使っていると認識できるのだ。

しかし、ルーナと対峙するノリリーナには、その歪みがまったく感じられなかった。ノリリーナの力がルーナより勝っている、という可能性も無きにしも非ずだが、その場合であっても、ルーナならばわずかながらの魔法行使の影響を感じとることはできるはずだ。

にもかかわらず、ルーナにその不自然な歪みは認識できない。となれば、それはやはり魔法ではないということだ。

つまり、ノリリーナの現在の姿は、おそらく先日ルーナたちが会った時とは別の、もう一つの彼女自身の姿なのだ。

「えーっと、女の人だったんですね」

ようやくルーナの口から出たのは、そんな間抜けな言葉だった。

自分で思っているより、混乱から立ち直ってはいないらしい。

「あら、あっちの姿だって、どう見ても女でしょう」

ノリリーナが、ルーナの言葉に胸を反らして答える。

髪型、顔立ち、声。胸はささやかだが、彼女を見て男性だという人物はまずいないだろう。

ノリリーナの主張は、至極ごもつともだ。

だが、ルーナが知るノリリーナはピンクの鶏だったのだ。

北の果てにある氷の城に住む謎の生物。神獣といえなくもないが、本人が否定していたため、生物としか表現できない。

名前こそ女性のようだが、そこから性別を判断するのは難しかった。あえていえば、体色のピン

クが女性っぽいといえば、そういえるかもしれないが。

「まあ、はい、そうですね」

ルーナは、とりあえず目の前の現実だけ受け入れようと、おざなりな返事をした。そして我に返り、コーデリアの件について礼を述べる。

「あつ、先日はありがとうございます。本当に助かりました。でも、あそこにノリリーナさんがいたのってすごい偶然ですね」

「ああ、あの時ね。あんなところで再会する予定は、あたしにもなかったから驚いたわ」

「そうだったんですね。でも、助かりました」

「いいのよ」

礼を言うルーナに、ノリリーナは鷹揚にうなずいてみせた。

「それで、今日はどうしてうちに？ ブレスレットの件ですか？」

願いを叶えてほしければ、対価を支払えというのがノリリーナのスタンスだ。

それを考えれば、差し出されたブレスレットについて、場合によっては買い取りの必要が出るかもしれない。相手がノリリーナであれば、先ほどのルーナの考えも、あながち間違いではなかったかもだ。

「そうねえ。ブレスレットに関しては、同等のブレスレットを融通してくれればいいわ」

「それでいいんですか？」

「ええ。たいした魔石を使っているわけじゃないから、そんなに難しいことじゃないと思うわよ」

「わかりました」

ルーナは素直にうなづく。

覚悟はしていたものの、難しい対価を求められなかったため、ルーナは内心安堵した。

しかし、ノリリーナの話は、まだ終わってはいなかったのだ。

「実は、先日の出会いは偶然だったけど、あたしがクレセニアに来たこと自体は偶然じゃないの」

「そうなんですか？」

「ええ。あたしの用事は、ルーナ、あなたよ」

「わたし!？」

ルーナの驚きをよそに、ノリリーナは話を続ける。

「あなたに良い話を持ってきたの」

「良い、話……」

「そう。探していたでしょ、神宝」

「え、手掛かりがあつたんですか？」

ルーナが身を乗り出すと、ノリリーナは真面目な顔でうなずいた。

魔族を倒す鍵となるアイテム、それが神宝だ。

事件で知り合った獣人——コットがその神宝を持っていたことにより、ルーナたちは圧倒的強者だった魔族を退けることができた。

けれど、その神宝はコットたちの一族が大切にすることで、譲ってもらうことなど到底できない

ものだった。

このままでは魔族に対抗することができないと悩むルーナたちに、朗報がもたらされる。

それは、未だ世界中に神宝が散らばっているかもしれないというもの。それを手に入れられれば、魔族に立ち向かえる可能性がでてきたのだ。

そのためルーナは、神宝の情報を喉から手が出るほど欲している。神宝についてノリリーナから新しい情報が得られるのは、とてもありがたいことだった。

「それはね、神宝の手掛かりが書かれた本なの」

「どんな本なんですか？ ノリリーナさんは読んだんです？」

矢継ぎ早にルーナが尋ねる。けれどノリリーナは、困ったように眉を下げた。

「読んではいないわ。手にはしていないから」

「ええ？」

わけがわからず、ルーナは困惑するばかりだ。

神宝の手掛かりが書かれた本があると、ノリリーナは言う。しかしその実物を手にしたことはない。

今の時点では、ノリリーナの情報だけで、本当に本があるのか、また、その本に神宝の手掛かりがあるのか、確証はない。

本来ならば、もう少し確証のある話をしてほしいと言いたところだ。

しかし、相手は『とこしえの賢者』ノリリーナ。

彼女の住処である氷の城で、図書館のような蔵書の数々を見知っているルーナとすれば、彼女の言葉を一笑に付すことなどできない。

（世界中から書籍を集めてるノリリーナさんだもん。読んでないものでも、それを口にするなら確証があるのかもしれないよね）

ルーナはそう結論付けると、改めて口を開いた。

「ノリリーナさん、その本はいつたいどこにあるんですか？」

ルーナの言葉に、ノリリーナは一瞬驚きを見せる。そして、からかうように聞き返した。

「信じるの？」

「信じちゃだめなんですか？」

あっさりと返すルーナに、ノリリーナは呆気にとられた様子で息を呑む。そんな彼女に、ルーナはクスリと笑ってみせた。

「あ、でも、対価ってなんですか？ 払えるものならいいんですが」

「ふふふ、やっぱり面白い」

ノリリーナは楽し気に笑うと、ルーナを見据えて告げた。

「本はね、ヴァイントス皇国にあるの」

「ヴァイントス……」

クレセニアとエアデルトに並び、三大強国と称される国の一つだ。

侵略によって国土を広げてきたヴァイントス皇国は、クレセニアにとって油断のならない国として

認識されている。

しかも近年、ヴァイントス皇国で長年在位していた皇帝が亡くなった。その後、後継者が帝位を継いだものの、情勢が乱れているのだ。

そんな国に、ルーナが足を踏み入れるのは容易なことではない。

（ヴァイントス皇国か……。戦争をしているわけじゃないけど、クレセニアにとってエアデルトのような同盟国でもないし、簡単に行きますって言える国じゃないよね。それに……）

ルーナは考えをまとめつつ、一つの疑問を口にする。

「その本は、ヴァイントス皇国にあるんですよね」

「そうよ」

「では、ノリリーナさんの所有物ってわけじゃないですよね」

「あたしのではないわ」

「じゃあ、ノリリーナさんに対する対価というのは、この情報についてだけ？」

「あたしに対しての対価は必要ないわ」

「そうなんですか？」

ルーナは釈然としないままつぶやく。

単なる親切でもってきた情報であれば、ありがたいと感謝するだけだ。だが、何かがひっかかるのだ。

そんなルーナの気持ちに気づいたのだろう。ノリリーナは苦笑しながら言った。

「対価は、本の所有者に払ってもらいたい」

「どういうことですか？」

「所有者——ユリスと言うのだけど、彼を助け出してくれれば、本も一緒に持ち出せるわ。彼を助け出したなら、その対価として彼が本を差し出す、ということよ。あれにとっては、それほど困るものでもないから大丈夫」

「助け出す……？」

「ええ。彼を助け出してほしい」

（本の持ち主を、助け出す？ 監禁とかされてるってこと？ それすぐくやばい人とかじゃないよね？ 暴力沙汰だとわたしが役に立てると思えないんだけど）

戸惑うルーナの様子に、その心中を察したのだろう。ノリリーナは軽く肩を竦めた。

「断るも自由、受けるも自由。だけど、その本はきつとあなたたちの役に立つと思うわよ。それだけは確か」

言い終わると、ノリリーナはすつくと席を立つ。そして、呆然とするルーナをよそに、部屋を出るため歩き出した。

「ちよつ、ちよつと待ってください！」

慌てて引き留めるルーナに、ノリリーナがドアの前で振り返った。

「何？」

「何って、助ける人の名前はわかりましたけど、その人をどこから助け出すっていうんですか？」

「ヴィントス皇国よ」

「いや、それ範囲広すぎるでしょ！」

思わず突つ込むルーナ。

「それくらいは自分でなんとかしなさいよね」

しかしノリリーナは、事も無げに言い放った。

「ええつ、ちよ、無理でしょ、ノリリーナさん！」

叫ぶルーナをよそに、さつさとドアを開けて出ていくノリリーナ。

慌てて駆け寄ったルーナだが、無情にも目の前でドアが閉まった。

ルーナは一瞬呆気にとられた後、ハッとドアノブを掴んでドアを開け放つ。だが、不思議なことに、長い廊下にノリリーナの姿はもうなかった。

「嘘でしょ……」

——あとは、そちら次第。

ドアを開けたまま呆然と佇むルーナの耳に、ノリリーナの声が聞こえた気がした。決断を任されたルーナは、混乱しながら何度も頭の中でその言葉を反芻するのだった。

思いがけずノリリーナと再会したルーナ。

もともと彼女が名乗るまで、コーデリアを助けてくれた女性と、ピンクの鶏にせうじであるノリリーナはまったく結びついていなかったのだが。

そうして驚愕の再会をした彼女は、ルーナが求めていた神宝の手掛かりをもたらししてくれた。しかし、そのためにすべきことが問題だった。

神宝の行方。それを示す本があるとノリリーナは言う。

そして、それを得たいのであれば、本を所有している人物を救出すること。それが、ノリリーナの提案だった。

だが、該当の人物がいるのはヴィントス皇国だ。

問題の一つは、単純にルーナの立場である。

これまでもあちこちの国を訪れているルーナだが、本来貴族令嬢——それも公爵令嬢ともなれば、国内の移動であつても簡単なことではない。

これまでそれが許されてきたのは、明確な理由があつたことと、同行者のおかげだった。

しかし、今回の場合はこれまででのようにはいかないだろう。同行者として思い浮かぶ面々は、揃

って多忙な者たちである。さらに、自分自身にしても、この時期に学校を長期に休むような名目上の理由もなかった。

次にあげられる問題は、距離だ。

クレセニアからヴィントスに行くとなると、一か月以上の行程が必要になるのだ。

そして、最後にして最大の問題は、クレセニア王国とヴィントス皇国との関係だ。

兄弟国と称されるほど良好な関係を築くエアデルトとは違い、ヴィントス皇国とクレセニア王国の関係は、円満とはほど遠い。

現在交戦中というわけではないが、国家間の交流は最小限といった状況だ。

その理由は、ヴィントス皇国の先々代の君主にある。

四十年ほど前のことだ。当時の皇帝が突如、大陸の制覇を目標に掲げて近隣の小国に攻め入り、国土を広げ始めたのだ。

クレセニア王国とヴィントス皇国は、直接領土が接しているわけではない。しかし、周辺の小国を呑み込んでいった後の狙いは明らかだった。

結局、クレセニア、エアデルトを中心に、ヴィントス皇国に反発する小国が連合を組んで戦つたため、かの国の野望は打ち砕かれた。しかし、両国の間には、少なくとも禍根かこんが残つたのだ。

その先々代の皇帝が亡くなった後、後継となつた前皇帝。彼は、父親のような苛烈な人物ではなく、それ以上領土を広げることに無関心だった。

だからといって、クレセニアとの関係を修復しようとしたわけではない。それどころか、クレセ